

幻視される始原

——中世神道書における天地創成説——

伊藤 聡

I 両部・伊勢神道書の天地創成の記述

鎌倉時代の両部神道書や伊勢神道書の、世界及び日本国創成の記述は、旧来の神話記述をベースにしながらも、仏典の起源神話を関連づけたり、原初の状態を密教や禅のタームで説明している。たとえば、『大和葛城宝山記』の冒頭は、

蓋し聞く、天地の成意、水気変じて天地と為ると。十方の風、至て相對し相触れ、能く大水を持す。水上に神聖化生す。千頭二千の手足有り。常住慈悲神王と名て、葦網と為す。是の人神の臍の中に千葉金色の妙宝蓮花を出す。其の光大明なること、万日の俱に照すが如し。花の中に人神有り、結跏趺坐す。此の人神復た無量光明有り。名て梵天王と曰ふ。此梵天王の心より八子を生ず。八子、天地人民を生ずる也。此を天神と名く。亦た天帝之祖神と称する也。

とあるが、既に先学が指摘するごとく、『大智度論』巻第八の「復次劫尽焼時一切皆空。衆生福德因縁力故。十方風至相對相触能持三大水。水上有二千頭人二千手足。名爲韋紐。是人臍中出千葉金色妙宝蓮花。其光大明如万日俱照。華中有

人結跏趺坐。此人後有無量光明。名曰梵天王。此梵天王心生八子。八子生天地人民。是梵天王於諸姪嘖已尽無餘」を改変したものである(原典は『雜譬喻經』三二)。ただ、右の傍線で示すように、原文の「韋紐」(＝ヴィシユヌ)を「葦網(葦牙)」と表記し、また「神聖」の語を挿入することで、『日本書紀』巻一冒頭の記述と接続する。

また、『豊受皇太神御鎮座本紀』の、

皇天倭姫内親王託宣してのたまはく、各々念へ、天地大冥時、日月星神の像虚空に現れし代、神足地

を履みて、天御量を中国に興てて、上去下来而來、六合を見れり。天照大神悉く天原を治し、天統を耀かす。

……蓋し聞く、天地未だ割れず、陰陽分れざる以前、是を混沌と名づく。万物の靈、是れ封じて虚空神と名づく。亦

た大元神と曰ふ。亦た国常立神、亦た俱生神と名づく。希夷視聽の外、氤氳氣象の中、虚にして靈有り。一にして体無し。故に広大慈悲を發し、自在神力に於て、種々の形に現はれ、種々の心行に随ひて、方便利益を為す。表はるる所を名づけて大日靈貴と曰ふ。亦た天照神と曰ふ。万物の

本体と為りて、万品を度すること、世間の人兒を母胎に信すが如し。

の傍線部はそれぞれ「無_二復神足_一履_レ地而行。身光_レ転滅。天地大冥。婆悉吒。当_レ知天地常法。大冥之後必有_二日月星像_一。現_二於虚空_一」(『長阿含經』第六「小緣經」)、「最初对_レ治根本無明。乃至最後对_レ治滅相。為_レ欲_レ簡_レ異始覺般若悟_二次第一_一故。何故始覺背_レ凡向_レ聖。上上去去為_二次第一_一。隨染本覺背_レ聖向_レ凡。下下来来為_二次第一_一」(『釈摩訶衍論』卷第三)、「大象_ハ無_レ形獨立_二陰陽之首_一、玄功_ハ不_レ生_二シテ_一幸混成_二天地之先_一。生_二万物_一而莫_レ測_二其終_一、妙_ニシ_二万物_一而不_レ知_二其始_一。希夷視聽之外、氤氳氣象之中、虚_{シテ}而有_レ靈、一_ニシテ_一而無_レ體。」(『老子述義』序)に基づく。

さらに、『三角柏伝記』の

蓋し天地開闢の首め、水気の中、清濁有り、変化して陰陽と為る。陰陽変化して天地人を生ずるなり。故に神は道化の一氣、乃ち無の中の有なり。尺氏、虚神を以て実相と謂う。其の壞さざるを義と為す。

は、邵若愚の老子注釈である『道德真經直解』卷一「谷神不死、是謂玄牝」注の「谷以喻虚、虚者道也。神者道化之一氣、乃無中之有也。釈氏以虚神謂之実相、取其不壞為義」より、『天地靈覚秘書』の

古、天地分かれず、万物形れず、代て湛然凝寂にして、本より一物有ること莫し。虚無の中に於て大意の象を生じ、虚徹靈通す。是を万化の本源と為す。諸神の本地と謂う。本より是れ有に非ず、無に非ず。杳冥恍惚して、涯際を測

ること莫し。本と是れ所住無く相貌無し。而に物有りて混成す。天地に先だちて生れり。

は、禅籍である『圓悟心要』の「人人脚跟下本、有_二此段大光明_一、虚徹靈通、謂_二之本地風光_一」(上「示胡尚書悟性勸善文」)、「此道幽邃。極_下於天地未_レ形、生仏未_レ分。湛然凝寂、為_二万化之本_一。初非_二有無_一、不_レ落_二塵縁_一。焯焯燁燁、莫_レ測_二涯際_一。」(下「示黄太尉鈴轄」)に依拠するのである。

II、曼荼羅としての神宮

以上のように神話を再構成する試みによつて、これら中世神道書のテキスト制作者は何をを目指していたのであろうか。かかるパッチワークのような文章構成は、『日本書紀』冒頭の一節が、『三五曆記』や『淮南子』に文を組み合わせて作文されていたことを彷彿させる。さらにここでは、別の典拠から抜き書きにより、『書紀』の文章がさらに記述しなおされている訳である。この作業を偽書制作者の冥い熱情と読み取ってはならない。「書紀」と伝典と道家文献の始原に関する個別的記述が、究極的には同一の事実についての描写であるという中世的世界観に基づき、確信が背景にあると理解すべきだろう。

さて、このような神話叙述が綴られていく背景として注目したいのが、「観想」である。「観想」とは、仏教において、現象の背後にある真実を、イメージによつて感得する方法で、浄土信仰における浄土や阿弥陀仏の相を観する法(『観無量寿經』)をはじめ、日想観、不浄観、阿字観、数息観、道場観などある。神に詣でる鎌倉時代の僧侶たちは、今日の我々のように単に神

前で拍手・礼拝していたのではない。観想法を通じて、神の背後に仏を見ようとしたのである。

特に伊勢神宮についていえば、これは地上に出現した両部曼荼羅であった¹²⁾。十一世紀より起こった天照大神¹³⁾・大日如来習合の信仰(『真言付法纂要抄』)は、東大寺大仏と天照大神の同体説を生み出し(『東大寺要録』『大神宮諸雜事記』)、その後起こった東大寺焼亡とその再建事業をきっかけに僧徒による参宮がブームとなる。彼らに共有されていたのが、内外両宮から成る伊勢神宮を、胎金両部曼荼羅と見立てることである(内宮¹⁴⁾・胎藏界、外宮¹⁵⁾・金剛界)。その認識を示すよく知られた例として、自身も参宮した無住の『沙石集』巻一第一話「大神宮御事」の以下のくだりがある。

…内宮外宮ハ両部ノ大日トコソ習伝ヘテ侍レ、天ノ巖戸ト云ハ都率天也、タカマノ原トモ云ヘリ、神代ノ事皆由有ルニコソ、真言ノ意ニハ、都率ヲハ内証ノ法界宮密蔽国トコソ申ナレ、彼内証ノ都ヲ出テ、日域¹⁶⁾迹ヲラレ給フ、故ニ内宮ハ胎藏ノ大日、四重曼荼羅ヲカタトリテ、玉カキ、水カキ、アラカキナント重々也、カツヲ木モ九アリ、胎藏ノ九尊ニカタトル、外宮ハ金剛界ノ大日、或ハ阿弥陀トモ習侍也、然トモ金剛界ノ五智ニ形トルニヤ、月輪モ五アリ、胎金両部陰陽ニ官ル時、陰ハ女、陽ハ男ナル故ニ、胎ニハ八葉ニカタトリテ、八人女トテ八人アリ、金ハ五智ノ男ニ官トリテ、五人ノ神楽人トイヘルハ此故也¹⁷⁾、

ここでは社殿を取り巻く荒垣(外玉垣)・玉垣・瑞垣の構成が四重曼荼羅に見立てられているが、称名寺に伝来する(県立

金沢文庫保管)両宮曼荼羅などでは、社域全体を曼荼羅として構成、中心に本殿を置き、周囲に別宮等を配する¹⁸⁾。

何れにせよ、参詣者にとつて神宮は地上に出現した曼荼羅世界そのものであり、社域を歩み各社殿の前に至る行為は、曼荼羅の諸尊に相對することにほかならなかつた。事実「天照太神儀軌」というその具体的方法を教示したテキストがあり、そのなかには各宮の前で結ぶ印相と陀羅尼と利益が次のように列記されている。

十一天子惣印、三古形。皆許字を用る。咒許娑婆訶云々。

第一随荒天(内宮、荒祭宮)引用者法、以下同。印蓮花合掌。

十一と同印を作るなり。咒に曰く、但陀尾尾補攏藥陞娑婆訶。荒き悪しき物に随ひて利益し給ふ神なり。

第二龍宮天子(内宮・滝原宮)。上印のごとし。咒に曰く、

噯尾補攏尾摩隷娑婆訶。内外所望叶ふなり。

第三水神天子(内宮・滝祭神)。印、前の如し。咒に曰く、

噯儼奸哩儼娑婆訶。智慧を施す神なり。

第四月夜天子(外宮・月夜宮)。先の如し。咒に曰く、噯

惹野藥陞娑婆訶。悪事を断除する神なり。

第五月読天子(内宮・月読宮)。咒に曰く、吽縛日羅入縛

攏藥陞娑婆訶。如意宝を与ふる神なり。

第六伊象宮(内宮・伊雑宮)。咒、噯誡底誡訶寧娑婆訶。

所求成与せしむる神なり。

第七伊佐奈岐宮(内宮・伊佐奈岐宮)。咒に曰く、噯塵嚙

攀縛底娑婆訶。

第八高宮(外宮・高宮)。咒に曰く、噯薩縛幡跛娑婆訶。

胎生苦を助くる天子なり。

第九並宮（内宮・滝原並宮）。咒に曰く、唵薩誡々曩々尼
戌達寧ソハカ。慈悲除く^{深か}広き神なり。

第十興玉（内宮・興玉宮）。咒に曰く、唵吉里々々縛曰羅
ソハカ。福寿を与ふる神なり。

第十一風宮（内宮・風日折宮）。咒に曰く、唵儼摩里々々々
娑縛訶。飲食・衣服を与ふる神なり。

神前では、このような結印・念誦だけではなく、観想を中核とする、より大がかりな作法も行われており、その実践方法を示したテキストが現存する。次節よりそれらについて具体的に見ていきたい。

Ⅲ、神前の観想法

代表的な両部神道書のひとつに空海に仮託された『両宮形文深釈』と称する書がある。伝本によつて上下二巻本と上中下三巻本があるが、ここでは三巻本により、その構成を説明しておく。先ず上巻は「両宮形文深釈巻上」と題し、神宮の秘説について記述される。橘諸兄・行基参宮譚及びそれになまつわる偈頌・秘歌にはじまり、神璽之起、日月宮殿（内外宮）、心御柱、智木、鯉木の秘伝に及ぶ。中巻（二巻本の下巻）が「神代本縁深釈巻中」で、内容は天神七代・地神五代についての秘説。本地・種子・三昧耶形・梵号、金剛号・密号・真言が説かれる。

そして下巻が「神法楽観解深法巻下」、これが神前で行う「大神法楽法」について述べるものである。同法は、①宝殿に向う、②観想、③真言を唱える、④『天地八陽経』の呪を誦う、⑤『大

般若経』の呪を誦う、⑥道場観、の順序で行われる。

このうち、観想する箇所は②と⑥である。まず②の本文を掲げる。

観想せよ。実相真如宝莊嚴淨土、其の中に【吽】字有り。變じて金剛宝股と成る。宝股變じて風氣と成る。風氣転じて神と成り、神變じて生と成り、生転じて王と成り、王變じて仁と成り、仁転じて正覚正智と成る。正覚正智、人本師釈迦牟尼仏、三千世間教主大導師也。本地真如之都に帰らんが為に、権に大般涅槃に樂しみ給うと雖も、大悲差まらず、遺身を留め給ふ。是れ真実の宝珠也。是れ濁世末代神方便至極の大願なり。

ここにおける観想は、実相真如宝莊嚴淨土↓吽字↓金剛宝股（金剛杵）↓風氣↓神↓生↓王↓仁（人）↓正覚正智↓釈迦↓遺身（仏舍利）↓宝珠と展開する。神前における作法である以上、神体をこのように表象しているわけである。今日の我々から見ると奇妙に感ずるが、同時代のほかの神道書の記述と並べると、ほぼ同一の発想に出会う。

たとえば、『心柱麗氣記』や『天地麗氣府録』に見える以下の記述はここと直接関連しよう。

此の杵は我が身の三昧耶形故、二所皇大神宮は、伐折羅を以て宗と為す。伐折羅は独股、独股は心肝玉、玉は神、神は正覚の理、理は法界一如、一如は真正覚、正覚は心御柱、柱は心王、心王は大日、今両宮是なり。神は心御柱、柱は則ち衆生成仏の因縁、法界縁起是なり。

右では「伐折羅」（金剛）——「独股」（金剛杵）——「心肝玉」（宝

珠)―神―正覚理―法界一如―真正覚―心御柱―心王―大日如来と、連想的に伊勢両宮の本質を説明しているが、②の観想の流れと極めて類似することが分かる。

このような表象の連鎖は、伊勢両宮の本質へ接近しようとする営みであるが、と同時に、始原の世界を観想の中で幻視せんとするものでもあったと考えられる。たとえば、前出『大和葛城宝山記』には、先とは別の箇所以下のような天地開闢の記述がある。

天地開闢の嘗、水変じて天地と為てより以降、高天海原に独化の靈物在り。其の形葦牙の如し。其の名を知らず。爾の時、靈物の中よりして、神聖化生す。之を名づけて天神と曰ふ。亦た大梵天王と名づく。亦た尸棄大梵天王と称す。天帝の代に逮びて、靈物を名づけて、天瓊玉戈と称す。亦た金剛宝杵と名づく。神人の財と為り、地神の代に至り、之を天御量柱・国御量柱と謂ふ。茲に因り、大日本州の中央に興り、名けて常住慈悲心王の柱と為す。此れ則ち正覚正智の宝にて坐すなり。故に心柱と名づくるなり。天地人民・東西南北・日月星辰・山川草木は、惟は是れ天の瓊玉戈の応変、不二平等の妙体なり。

ここでは、葦牙^{かみ}―神聖^{かみ}―尸棄大梵天王―天瓊玉戈(＝金剛宝杵)―天御量柱・国御量柱―常住慈悲心王―心柱という順序で、最初における神性の生成の継起が記される。②にもかかる起源論的含意があることは、金剛宝股↓風氣↓神といった表象の連鎖により窺われる。相違は右では心御柱に収斂させているのに対し、②は舍利Ⅱ宝珠を最後に置く点である。ただし、心御柱と

舍利Ⅱ宝珠は同一視されているのであるから、本質的な違いがあるわけではない。

さらにいえばこれら一連の神話記述は、宇宙全体のはじまりであると同時に、我らひとりひとりの発生の過程を記したものである。たとえば、『類聚神祇本源』天地開闢篇に引用される『宝基御靈形文図』に「天地開闢基、在二大光明」。其中有「精氣」。名曰レ神、亦名レ心。爾時為二万物応化神」。仮名号「広大慈悲大御神」也」とあるように、神の生成と心の生成をパラレルなものと思なす発想は、中世神道の生み出した新しい神観念であった。

②についても、「実相真如莊嚴浄土」に卍字を観想しているが、卍字は胎金大日(法身)の表示であると同時に、識大(心)の種子であるから、ここは両方の意味を含ませているのだろう。つまり、法身仏と我ら凡夫の心が一体の境地を示しているのである。次いで、それが法身仏の三昧耶形たる「金剛宝股(金剛杵)に変じ、さらに風氣から神となり人となると観想されているのである。宇宙の生成と個々人の発生が何れの法身仏の境地のあらわれと見なすことにより結びつき、仏と神と我(人)が一体であることが感得されるのである。

神道観

法界道場を観想し、無所不至を観念せよ。草木森羅は真如の道場なり。無窮にして自在なり。神も万法も空にして自性無し。無自性故、善悪無し。無善悪故、神通自在なり。神通自在故空なり。空故万法一心なり。万法一心故、法界

と我身と一心なり。一心故無作心源なり。亦た諸法は無願無染故、非情草木も仏身なり。仏身故、法身微細身も五大所成なり。虚空も亦た五大所成なり。草木も亦た五大所成なり。法身微細の身と虚空と草木と、一切無所不遍なり。是れ虚空なり。是れ草木なり。即ち法身なり。肉眼に於て色色を見ると雖も、草木は仏眼に於ては微細の色あり。是の故本体を動ぜず。仏を称え妨げ無き故、五智転じて五日月輪を成る。月輪中に法界を撰す。法界は五智なり。五智の種子【バン・ウン・タラク・キリーク・アク（金剛界五仏種子）】字出現して、変じて五神通と成る。水珠所成・火珠所成の日珠・月珠の御正体是れなり。亦た【ア・ア・アン・アク・アーンク（胎藏界五仏種子）】字出現して、現在和光の力用を現わる。是れ天地和合して一体不二なり。両部平等義を表示す。無辺法界の有情、五輪に宿る。神は二十五神なり。二十五神に各二十五神あり。惣じて七百余神なり。是れ金剛界の因果不二の表曼荼羅なり。豊受皇大神の本誓、利生悲願の課する所なり。亦た心に観ずること月輪の如し。若し輕霧中に在れば、霧は是れ水なり。水は即ち是れ智なり。故に知霧は中有の有なり。大悲を表するは中有の智なり。智法身は定惠の二辺に有り。水を以て之を喩へば、澄淨なるは是れ定、一切色相を照らすは是れ惠なり。密教の説く所、定辺は無言説なり。惠辺は言説有り。水は澄淨にして色相を照らす。然して願行風て波浪起つ。波浪は即ち声と作す。是れ説法の音なり。惟れ内外両宮は、言説教を離れ、自受法樂せしむる両部大日な

り。大日は天地の如し。天地は衆生を生む。衆生は即ち一切有情非情四大大の羯摩和合の大神なり。最初の一念に依り、凡聖相ひ分る。凡は初めより念有の有なり。無の無なり。聖は有無平等にして是非を立てず。迷悟二無く、動転無し。動転無き故に、金剛堅固なり。是れ仏身為り。仏身は本来自性の理なり。斯の理は智を以て照らされ、顕現を得。故に神明の世間に出生し給ふ。是日月所化の菩薩の大慈大悲願力なり。法爾眼前の理智、之を思へ之を思へ。道場觀とは、密教の修法において、心中に本尊の道場を現前させる觀法であるが、ここでは、伊勢神宮の神域を曼荼羅と見立てており、内容からすると外宮を以て金剛界曼荼羅と感得する方法を説いたものである。草木（非情）と神と我身（心）と仏身とが一体であることを、何れも五大（地・水・火・風・空）所成なることより始め、さらにそれを法界の境地として月輪を觀想する。さらにそれを五智、五神通、五輪と連想を進めて金剛界曼荼羅に至る。外宮豊受大神は、内宮天照大神が日輪に配されることに対応して、月輪に関連づけらるるとより、金剛界外宮と見なすことが示され、次いで、内外両宮に押し広げて、両宮の本体たる両部大日は、衆生を生み出す。衆生は凡と聖に分かれ、凡は無格別であるに對し、聖は有無平等で、迷悟なく、動転（変移）ない。これが仏身である。本来自性の理である仏身が、智の力で現世に顕現したのが神明、すなわち日月所化の菩薩たる内外両宮であるといふのである。このような觀想を通じて両部大日が内外両宮として、ここに存在していることの理由が感得され、僧徒たる我が神前にある

ことの得がたき意義が納得されるわけである。

IV、観想を通じて生成される神話

「神法楽観解深法」と並んで、神宮における観想の実態を示す重要なテキストに『天照坐二所皇大神正殿観』がある。本書は三寶院流の勝賢（一一三八〜九六）が守覚法親王（一一五〇〜一二〇二）に伝授したとされる『野決』と総称される秘伝のひとつである。『野決』が勝賢から守覚への真伝であるのか、後世の仮託であるのか議論があるが、その点はしばらく措き、その本文を示す。

観想せよ。浄法界中に大日本国金剛宝柱有り、**国璽**くわにしほ天御量柱あまのみりかぢ（a）（d）、天地の大廟、数多の宝宮を興てて、**下**【阿】字本妙藏摩尼珠蓮華を開き、【鏡】字正覚本有不生玉に居す。其の中に天の璽、八坂瓊曲玉、八咫の鏡、及び十種玉、生玉、死玉、阿津鏡、鏡津鏡、道反玉、蛇比礼、蜂比礼、八握劍、円輪劍有り（a）。神宝日出づる時（b）、二所皇大神、天下を（為）治すべき神財戦具の類なり（a）。凡そ二所皇大神は、諸粟の種子、万物の物体なり。天地の姿にて坐す。所以に法界普門大日如来、蓮華三昧の場を出て（b）、加持門に趣き、【覽・鏡】二字と現じ、水火和合の法雨を灑ぎ、一味平等の法位に住し、不二色心の形を表し、百福莊嚴の儀を秘し、無相無念の極位に登り、和光利物の靈鏡と顕る。内宮には則ち八葉開葉の御靈鏡、上に諸仏出入の九輪を上はす。下に諸神通化女天像を下す。外宮は則ち円満の御靈鏡、上に如来秘密の五輪を上し、下

に諸天惣体の男天像を下し、都て二面の御正体、徑九寸三分の芭蕉の葉の厚、思惟二尺八寸なり（c）。日生摩尼と月生摩尼と、天地を照らして止むこと無く、内外を徹して隔て無く、四方欠けたること無く、上下余ること無し。微塵中に転法輪に座し、究竟窮極に示し、無窮無念に乗ず。手に流鈴を取り、口に甚深の般若を説き、心に不生の妙理を觀じ、足に菩提の妙蓮を踏み、畢竟空寂の旨を談ず。是れ諸仏万徳の深行、是れ諸神降化のしほ為なり。神は則ち諸仏の神、**仏**は則ち諸神の性なるが故に（b）、天照坐二所皇大神宮・両部遍照如来は、十仏刹微塵数世界、身量三千大千世界の本主なり。無尽無余一切衆生界の意願作業に於て、皆悉く円満し已て、実相真如の深理を了はしめんと欲し、如意宝珠と成ず。宝珠、衆生の心上に還居し、五色の光明を放ち、五部の微細法を説く。此れ真言行者の妙術なり。風雨は時に順じて太平、萌芽は節を得て開敷す。四季安穩に、國中安寂す。是れ菩提心始めの始めとす。其れ菩提心は有情非情の形体、【鏡・阿】本有曼荼羅なり。故に【鏡】字變じて如意宝珠と成り、宝珠變じて天曼荼羅金剛界九会應刹の聖衆と成り、【阿】字變じて如意宝珠と成り、宝珠變じて地曼荼羅胎藏界十三院應刹聖衆と成り、天地和合し、自受法樂し、定惠術を廻らし、哀愍外護の神威を垂る（d）。上有頂の有頂に及び、下無間の無間に至る。塵々法界、法界塵々、在々処々、至らざる所無し。其の体を捨てずして其の衆に交り説法す。二所内外両宮、界内界外の諸別宮は、各々五大・八大、二十天、内海外海龍王衆なり。其の御形

を大梵天と観ず。其の形は、摩訶盧舍那の本地、御正殿の内、大覚大悲の阿字床に座す。御舟形・御種代に光明の妙朱を会れ交り、之に鎮座し奉る。以下金輪聖王の玉体安穩、宝祚延長、国は泰に人は蕃ふ。平等平等恵まします。生々日は（ひ）月赫（つき）、突（つ）、和（わ）、光（ひかり）、為（な）、皆是れ阿耨多羅三藐三菩提、神達仏阿日大鏡なり。是の如く観じ了り、三界加持す。

本書は、「正殿観」の名が示すように、神宮の正殿の前で行うもので、その神体たる靈鏡を觀想する作法である。まず、正殿の床下の心御柱（国璽天御量柱）を、浄法界中に天御量柱（大日本国金剛宝柱）と観ずる。そこに宝殿があり三種神器・十種神宝が納められている。これらは二所皇大神が天下を治めた当初に使用した武具であるとし、そこより、大日如来が皇大神兩宮として降臨した原初を観ずる。その姿は靈鏡であり、同時に摩尼宝珠であり日・月として天下を照らして、十仏刹微塵數世界に遍満し、さらに個々の衆生の心中にも還居して菩提心を起こさしめる。菩提心は鏡・阿の本有曼荼羅で、鏡字は變じて金剛界九会の聖衆となり、阿字變じて胎藏界十三院衆生となる。内外兩宮と諸別宮はその曼荼羅世界を構成する、というのである。神殿中の靈境を觀想しながら、それが大日如来のこの地に降臨した宝珠であり、環境世界と衆生の内的世界に遍満していること、内外兩宮の社域はその曼荼羅世界を表象していることを感得するのである。

右の『正殿観』の記述において興味深いのは、その字句表現が、複数の両部神道書と密接な関係を有すると考えられること

である。以下、それを示す。対応する箇所は傍線部を付した。

(a) 『仙宮秘文』

吾れ聞く、以代皇天御中主の詔命を承け、天皇孫尊、天降りましましし時、鬼神を平らげ天下を治めし靈異の物、三百六十種の神宝有り。所謂の天之八坂瓊曲玉戈・玉裳比礼・天衣・白銅鏡・神劍の類、是れ三百六十種の中、用ふるに天瓊玉戈を以て、最長と為して國御量柱を立つるなり。

(b) 『中臣祓訓解』

天地と与に以て長存し、日月と將に久しく樂しからん。所為に嘗天地開闢の初め、神宝日出づる時、法界法身心王大日、無縁悪業衆生を度せん為に、普方便の智慧を以て、蓮華三昧の道場に入り、大清淨願を發して、愛愍慈悲を垂れ、權化の姿を現じ、跡を閻浮提に垂れ、府璽を魔王に請ひ、降伏の神力を施して、神光神使、八荒に駅し、慈悲慈檄、十方を領し、より以降た、忝くも大神、外には異神教の儀式を顕し、内には仏法を護る神兵と為る。内外詞異なるも、化度の方便に同じく、神は則ち諸仏の魂、仏は則ち諸神の性なり。

(c) 『兩宮本誓理趣摩訶衍』

一、内宮は八葉界華御靈鏡に坐す。徑り八寸。輪二尺四寸の中に、八葉の思影亘る。下に七寸の天女像に坐す。
一、外宮は五日月輪円形御靈鏡に坐す。徑り八寸。輪り二尺四寸之中、五の円輪の思影亘る。下に男天像に坐す。是れ梵天帝釈二天王に坐す。已上内証外用、本有修生、因果

両部曼荼羅に表するなり。²⁰⁾

(d) 『両宮形文深釈』上

天皇御^{あめのみこと} 宇、大和姫皇女、天の詔命を承け、梵宮を移

して、造^{つく}伊勢内外両宮を造れり。造体一なりと雖も、其

文各別なり。豊受皇大神は、五大輻輪にて座す。天照皇大神は、八葉開花して座す。亦た其の一味平等、内心一なり。

天の御量柱を黄金の宝座に興て奉りて、御形を棟梁に表し奉るなり。惟れ内には胎藏界に通じ、地曼荼羅と現す。外

には金剛界に通じ、天曼荼羅と顯るなり。²¹⁾

『内殿観』が、直接的・間接的にこれらを踏まえていることは明らかである(特に『中臣祓訓解』が参看されている可能性は極めて高い)。中世神道書の神話記述は、このように観想という実践行為と対応しているのである。『日本書紀』『旧事本紀』等と儒仏道の神話的諸説を融合することで成っている中世神道書の記述は、単に机上の文献操作として作りあげられたのではなく、神前観想などで表象されたイメージと多様な文献との往還のなかで文章化されていったものであったことを示唆している。

鎌倉時代、伊勢神宮に参詣した僧徒は、神前で結印誦誦しつつ、殿中にある神鏡を表象することで、大神即真如(「大日如来」なることを体感し、両宮と別宮の諸神を胎金大日如来以下の諸尊に見立て、社域を地上に出現した曼荼羅世界と感じた。そして現前する空間についてのかかるイメージは、同時に宇宙、日本、そして自分自身の始原へと時間的に遡り、それらが一体なることを感得する営みであったのである。同時期に次々に作ら

れた神道書は、このような神前観想を通じて幻視された始原を表現すべく作られたテキスト群だったといえよう。

注(1) 原漢文。大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵・度会廷佳書写本、一丁オウウ。

(2) 上妻又四郎「中世仏教神道における梵天王思想」(寺小屋語学・文化研究所論叢)一九八二年、末木文美士「中世の神と仏」(山川出版社、二〇〇三年)六三〜六六頁、彌永信美「中世神道Ⅱ「日本のヒンドゥー教?」論―日本文化史における「インド」(シリーズ大乘仏教10「大乘仏教のアジア」春秋社、二〇一三年)、拙著「中世天照大神信仰の研究」(法蔵館、二〇一二年)一六一〜一六三頁。

(3) 『大正蔵』二五、一一六頁a。

(4) 原漢文。大神宮叢書『度会神道大成 前篇』三七頁。高橋美由紀「伊勢神道の成立と展開」(大明堂、一九九四年)改訂版、ペリかん社、二〇一二年。

(5) 『大正蔵』一、三七頁c。

(6) 『大正蔵』三三、六一九頁c〜六一二〇頁a。

(7) 逸書。『大元神一秘書』(真福寺善本叢刊『伊勢神道集』、五二九頁)所引。

(8) 原漢文。真福寺善本叢刊『両部神道集』三三六頁。

(9) 『正統道蔵』洞神部玉訣類(『正統道蔵』三七二冊)。拙稿「神道の形成と中世神話」(刃部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座2―中世』ペリかん社、二〇一二年)

(10) 原漢文。真福寺善本叢刊『両部神道集』三八一頁。

(11) 『統蔵経』一一〇、七四〇・七四四頁。『国訳禪宗叢書』四、

- 五五・六〇頁。小川豊生「中世神学のメチエー『天地靈覚秘書』を読む」(錦仁・小川豊生・伊藤聡編『偽書』の生成)森話社、二〇〇三年)、同「十三世紀神道言説における禪の強度―『中世神学のメチエ』統稿」(『文学』六一六、二〇〇五年)。
- (12) その詳細については拙著『中世天照大神信仰の研究』(前掲)六九〜七七頁参照。
- (13) 慶長古活字本(『慶長十年古活字本沙石集索引―影印篇』八〜九頁)
- (14) 榑田良洪『真言密教形成過程の研究』(山喜房仏書林、一九六四年)二九七〜三〇三頁。
- (15) 原漢文。真福寺善本叢刊『兩部神道集』三五八〜五九頁。衍字と思われる箇所を一部省略した。
- (16) 原漢文。真福寺善本叢刊『兩部神道集』(前掲)四四五頁。
- (17) 神道大系『真言神道(上)』五一〜五二頁(『心柱麗氣記』、一四四頁(『天地麗氣府録』)。
- (18) 注(1)前掲書、三丁オ〜ウ。
- (19) 『度会神道大成』前篇、五〇六頁。
- (20) 原漢文。真福寺善本叢刊『兩部神道集』四四六頁。
- (21) 原漢文。同右、四五一〜五二頁。
- (22) 原漢文。真福寺善本叢刊『兩部神道集』四〇一頁。
- (23) 原漢文。神道大系『中臣祓註釈』三頁。
- (24) 原漢文。『弘法大師全集』五、二二〇頁。
- (25) 原漢文。真福寺善本叢刊『兩部神道集』四三五頁。